

昭和の幼稚園の歩み

私の経験

八坂富子



昭和七年から十一年まで

東京の都心部築地の幼稚園に通いはじめたのは昭和七年の春であった。「京橋朝海幼稚園代用保母を命ず、月俸三十円を給す、東京市」という立派なすかしの入った辞令をいただいたのは何日かたってからであったろうか、園長さんに連れられて区役所へ行き区長さんの手から渡されたように思う。学窓を巣立ったばかりの新米保母がこの日からスタートしたのである。それから四年五ヶ月短期間ではあったが勤務のこと、施設設備のこと、保育内容のこと、すべてについて白紙の上にあぎやかに染めていったその頁をめくってみると感慨ひとしおのものがある。

女学校の延長のような気分で進学して倉橋先生の講義をほれほれと聴きながら若き胸をおどらせたものである。そんな私にとっ

て朝海幼稚園の毎日は驚くことや壁につき当たることの連続であった。

その頃の朝海幼稚園

この幼稚園は明治時代の創立で専任園長千葉ひで先生は創立当初からこの幼稚園に三十年勤続して退官される二年位前であった。本郷第一幼稚園の小向きみ園長、四谷幼稚園の山下つや園長とならんで女性専任園長三羽鳥の一人であった。

今考えてみると随分信念を持って独自の保育をしておられたと思う。新参保母の私は先生の手足になってくるくと動きまわることと二十恩物の指導内容や指導方法を習得することで精一杯であった。

幼稚園の規模は三年保育四学級一六〇名の幼児で職員は園長と

保母四名、事務員一名、小使三名（男子二、女子一）の九名で多分全員公費の職員であったと思う。

園舎は新築の鉄筋三階建校舎築地小学校の一階南側全部が園舎にあてられていた。窓の高さも低くなっていたし、保育室四の他に遊戯室、職員室、小使室、倉庫など必要な設備は整っていたから多分最初から園舎として設計されたものようである。冬はスチーム暖房であったし、トイレは水洗、当時としては新しい設備であったかも知れない。床は板張りで奇麗に拭きこんであった。特に衛生については特殊な設備があつて食器の蒸気消毒と恩物や玩具のフォルマリン消毒を実施していた。

定期身体検査も区内の公立学校合同の計画であつたのかも知れないが、検査当日は園医の他に全科の専門医が遊戯室のコーナーに前日から器具を据えて丁寧に検診をしていたようである。疾病異常の解説や事後処置などが印刷物になっていて結果を家庭へ通知する時にそれをつけて渡していたようである。園医の巡視が月に二、三回はあつて、月末の府知事宛の衛生関係の報告書に巡視何回と書く欄もあつたので確実に実施されていた。

施設の面で一番困つたことは専用の運動場が無いことである。遊戯室のベランダから隣接の公園へ降りられる道がついていて、役所が了解の上で一日の内、時間を区切って公園の一部分を縄張りをして幼児全員出して遊ばせた。当時は財界不況な頃で公園の

ベンチには、あちこちにルンペンがひるねをしていたものである。小使いさんに「公園に出たいから支度をして下さい」と頼むと先ず通路の鍵をあけて、公園に縄を張り、ねている人を次々におこして、のいてもらう。それから重い箱ぶらんこや遊動木やシーソーを二人がかりでかついで出て梓にかけそれからやっと思も出す始末である。幼稚園にとっては心臓部である運動場の無い悲劇をしみじみ味わつた。

その頃の公園には深々と小砂利が敷きつめてあつて、走ると足が後へ戻つたり砂利がスツクの中へ入つたりして痛い。それでも当時は青かつた東京の空の下で、思い切り走りまわるのは楽しかつた。まわりの植込みには黒い土が見えるけれどくさりで柵があつてはいいれない。自分の幼い日に毎日遊び馴れた数寄屋橋公園の植込みに毎年赤い実のなる木があつた。それにひかれて、つくいくりをまたいで赤い実をむしつてしまった思い出が忘れられない。都心の子どもには土を踏むことが無い。土からじかに生えてくるものにたまらなく愛着を感じるものである。保育室の出窓の下に僅かなあき地を利用して砂場があつた。管理はよく行き届いていたが一日のプログラムや人数の関係で自由にはいって遊ぶことができなかった。一学級ずつ素足になつて身支度をして保母引卒の下ではいって遊んだ。素足にふれるきれいな砂の感触は何ともいえない。はいつている間だけは砂の上の自由を満喫した。

学級経営については第一年目は二、三年保育新入児四十名の学級を園長先生が担任をされて私が助手をつとめた。一日の保育プログラムは先ず会集から始まる。保育時間は平日は四時間で九時～一時まで、夏は八時半～十一時半、冬は九時半～一時半であった。園児は魚河岸の子どもが大部分で就任当時は魚のにおいが鼻についてならなかったがやがて馴れると平気になってしまった。区内の小学校にはほとんど公幼が併設されていたので、それでも歴史が古くて、園長への信頼から新橋、銀座方面から車で通ったり佃島から渡船で通っている子どももあった。

その頃の保育日誌や記録をたどってみると、週案と実践記録を同じ枠に書くようになっていた。

第週	自		月		日	検印	受持 保母
	至	月	日	日			
種目 会集	曜日	月	日	温	略	略	略
	曜象	日	象	度			
談話	手技	遊戯 唱歌	摘	要	略	略	略

大正十五年の幼稚園令公布後であるから観察が保育項目にはいなかったわけであるが、この枠の中では談話の中に庶物語として度々出てくるようである。土曜には次週の週案を枠の中に書いて下さるので私はそれに基づいて教材の準備をしたり、当日は指導を受けるばかりの体制にして園長先生をお迎えに上がる。先生の保育中は手足になって動きまわるというシステムで一年間を過ごした。二十恩物の手引書のようなものも無かったし、新しい項目が出てくる度に扱い方や指導の段階などについて学習し、新しい知識や技術を蓄積していった。

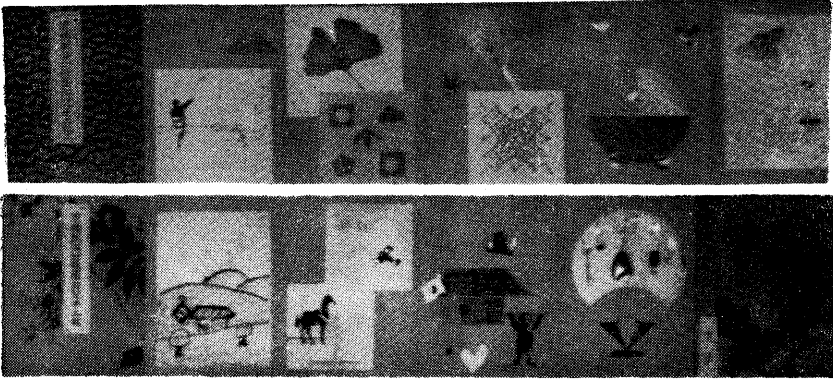
第一期保育日誌より（昭七、年少組）

会集 朝礼、訓話

入園につき心得、長者を敬うことにつき、独立心養成につき、日曜日の心得注意、泣かぬ約束をなす、長者の言葉を守ることに、前日参観ありし王殿下のことにつき、小遣を使わぬこと、いつわりを戒む、祭礼につきての注意、兄弟と仲良くすることにつき

談話（観察を含む）

● 童話 桃太郎、金太郎、舌切雀、牛若丸、大きい玉の話、猫のお見舞、海軍記念日につき、三匹の猫、時の記念日につき、兎と亀、花子の帽子、飛行場見学につき、七夕星につき、平竜さん権竜さん、お盆につき



京橋朝海幼稚園幼児手工帖

- この折手本は毎年年末に幼稚園が園児に贈るプレゼント。
- この表装ができてくると学級担任はどの子どもにもこの頁を全部うめるだけの手工を考えて作らせきれいにはって休みになる前日に持たせて帰す。
- 表紙の紙は保護者会長（銀座のむつみ屋）から寄付によるじゅうたんやかべ紙の見本帖，表装は東京フレーベル館が労をとる
- 黒表紙昭和七年度年少組
- 花模様赤表紙八年度年中組

●話し合い 前日のことを各児に問う

●庶物話 雀、猫、兎の特徴、虎

●言葉の練習

手技

●豆細工 火箸、魚、うちわ

●粘土細工 林檎、蜜柑、ばなな、随意

●きびから細工 傘、手桶、兎

●紙褶 山、富士山、舟、月、桃、蝶々、屏風、扇子、二軒家、オルガン

●画方 随意、遠足につきて、林檎、蜜柑、ばなな

●つなぎ方 桜、風車、紋型、雀

●紙貼 桃、花見、鯉のぼり、金魚、兎と亀、軍艦、猫のお見舞、お祭りのちようちん、夏帽子、岐阜ちようちん

●木の積立（恩物積木のこと）

柱、汽車、鉄橋、門、兵隊さん、舟、オルガン

●紐おき 池、山、金魚、舟

●排板 金魚

●排箸 随意

遊嬉唱歌

行進、風車、汽車、桃太郎さん、いぎこげ、だるま、桃太郎、雀の子、金魚、開いた開いた、金太郎、蝶々、飛行機、雀

雀、笛と太鼓、雀、水あそび、鳩ぼつぼ、かたつむり、でんでん虫、牛若丸、ほたる、とんぼ、お日様、雨降り、君が代

摘要

靖国神社臨時大祭につき休園、天長節の式挙行、例祭につき休園、端午の節句会挙行、ジューバル王殿下御来園、王殿下より御下賜の菓子を与う。春季遠足実施、身長体重胸囲測定、定期身体検査実施、砂遊びをなす、鎮守祭につき休園、笹に各児の作りたる物を吊さしむ。うちわを与う。摺紙を与う。

こうしてみると手技が保育内容の中で大きな部分を占めていたようである。

唱歌については文語調の歌詞で、おとぎ話の長い物語や、生活の歌でも明治時代からうたいがれたものには無いかと思われるもの、私が幼い日に祖母や母から聞いたことのあるなつかしい旋律もあった。系譜なども無いので、はじめてきく歌は範唱されるのをきいて、さぐりびきをしたり、採譜をしておいた。その二、三をあげると次のようなものである。

●風車(1)風車 風の まにまにめぐるまに
やまずめぐるも やまずめぐるも

(2)水車 水の まにまにめぐるまに
やまずめぐるも やまずめぐるも

●だるまさん

ころりころりところがって ひょこりひょこりとおきあがる
足も手もないそのくせに さてもふしぎなだるまさん

●いぎこげよ

いぎこげよ いぎこげよ

あまたのふねに おくれずに

●大江山

昔丹波の大江山 鬼共多くこもりいて

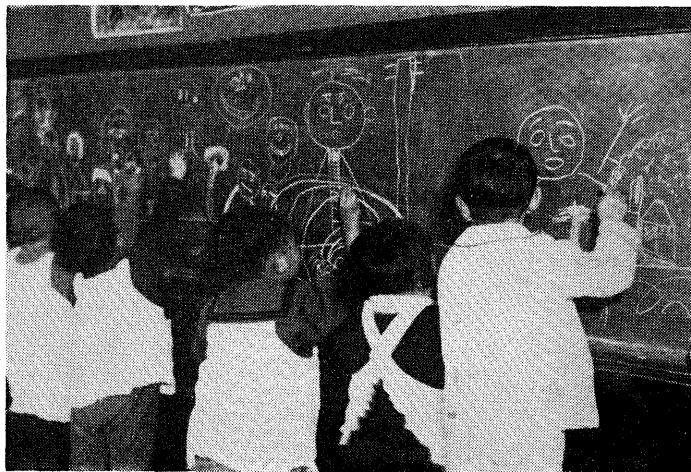
都に出ては人を喰い 若き娘をぬすみゆく

源氏の大将頼光は 時の帝のみことのり

お受け申して鬼退治 勢よくも出かけたなり(以下略)

勤務上のこと研修のこと

同じ屋根の下に二人の長(校長、園長)が両立していたので廊下の境の二枚戸が固く閉ざされたまま、開いたことが無い。宿直は二人の小使さんが交代で泊り、休日日直は四人の保姆が交代で勤務に付いた。平日の朝は早出が始業一時間前、その他が三十分前に出勤して玄関で園児を迎える。園児の通園は家庭から送り迎えをする。帰りは交通当番が築地の電車通りへ出て横断する子どもをの安全を見届けた。本願寺の方の自動車道より電車道の方が危険だったのは今昔の感がする。勤務中の服装は黒一色で、黒い袴に黒い上っばりで身をかため、襟元から若やいだ半襟がのぞくのも気兼ねなような雰囲気であった。園長先生だけは紺を着ておら



れるのが目についた。就任するとすぐえび茶の袴を全部黒に染め替えたり、黒い上っぱりを新調した。六十歳の園長先生が紺を着ておられるのに、十九歳の私がどうして黒装束に身をかためなければならぬのかしらと素朴な疑問もわいたが、きびしい試験に

あう度にそんな疑問は解消してしまつた。若い二十代の先輩の先生が二人で何かと話しながら、くすくすと内緒で笑っているのを見ると気味が悪かつた。

後日兼務園長時代に

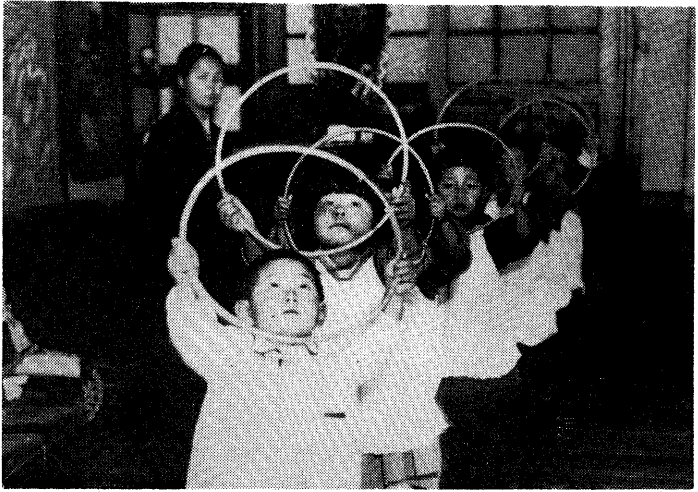
なつて小学校との通路が開放されてから教頭さんはいつて来られての第一声に「幼稚園は修道院かと思つた」ともらされたのも、もつともなことである。

保母の研修についてはしばしばその機会に恵まれた。東京市内に五〇前後の公立幼稚園があつたであろうか。それらの団体東京市保育会が主催して講習会や研究発表会が開かれた。併設園の講堂や小学校の音楽室、工作室の施設を開放して校長さん自ら専門分野の指導に当たつて下さつたこともある。

現場から木工の技術習得の要求にこたえて常盤小学校の工作室で木工の実習をしたことがある。園長さんの指導で切つたり削つたり、塗つたりして出来上がった庖丁さしは後日世帯を持つてから長くお勝手で重宝したものである。また番町小学校の音楽室で講師のお顔がはつきり浮かんでこないが、音楽鑑賞のことで「美しい曲をきいてどんなイメージがわいてくるか」ということであつた。くりかえしピアノできいた雨だれの曲、五線紙をめくる度にあの曲が出ると思ひ出す。

日本幼稚園協会の主催でフレイベルの生誕一五〇年祭が開かれたのもこの頃である。

お祭の水のバラック講堂で有院先生が父を語る如く瞑想をなさりながら語られた記念講演が目につかんでくる。戦後再度現職についてから、はからずもフレイベルの百年祭を広島で開催する機



律を絵本を見ながらうたうのは正しく新鮮な感じがした。家へ帰ると片端からひいてみても吸取したものである。

今でも愛唱されているチュールリップや鯉のぼりがそれである。

夏休みにはお茶の水の講堂で文部省主催の講習会が開かれて毎夏参加した。バラック講堂で人形芝居爆弾三勇士の名演技を見せていただいたのを最後に舞台は現在の大塚へ移った。

倉橋先生の「保育法真諦」

や「系統的保育案」が出版になる直前であったので講義の内容はそれらの理論の体系をどくと話された。当時は演台でマイクもお使いにならなかつたように思う。私なんか先輩の同伴として後の方の暗い座席で、かすかに聞こえてくるお声を一生懸命にノートした。講義の後には質疑応答の時間が設けられ、前の方

会に恵まれて、あの時の記録を「幼児の教育」で読みかえした。

バラック講堂で思い出す研修に「えほん唱歌」の講習会がある。ちょうどその頃、春夏秋冬の巻が順次教育音楽協会から出版されて、船橋講師から直接指導を受けた。はじめてきく歌詞や旋

の席から活発な誘導保育に対する反論や質疑が交わされた。真諦の初版が出版されると、その実践編は在学中に既に発足していたもので教育実習を通して身近なものに感じた。日本幼稚園史の初版が出たのも、その頃で、自分のやっていることを歴史の上に位置づけて再認識することができた。

話は少しさかのぼるが専任園長時代に甲辰保育会と称する組織があつて、一部の公私立幼稚園合同の団体でこれにも研修の機会があり、千葉先生のお伴をしてよく参加した。早蕨幼稚園で久留島先生から童話や時局談話を拝聴して独特なお話の味に接する機会も何回もあり、又瑞穂幼稚園では土川先生の指導でおどろき続けて若いエネルギーを発散したものである。

母校でも緑会の継続研究会が毎月開かれて倉橋先生が現場の悩みを聞いて下さったり、我々のうすつべらな理論を拡げたり深めたりして下さったようである。時には外来講師の指導を受けることもあり、内山先生の童話、葛原先生の童謡、曾根先生の英詩、武岡先生の声楽など頭の中に畳みこまれている。

兼務園長時代へ移行

就任第二年目を迎えて漸く年中組を担任させてもらうことができた。監視されているような雰囲気の中での学級経営は苦しかったけれど一度消化したものを自分の体から出していくことは一歩

進である。新しいものや変わったことをする時は放課後先輩の先生立合いのもで演出して園長さんに見ていただかないと心配で実行に移すことができなかった。こんな空気の中で手製の人形芝居も実演したり遊戯の新しい教材も少しずつ取り入れるようになった。根強い封建性の中で苦しみながら一年程経過した時、漸く任用替の申請をして下さったやうで九月頃「京橋朝海幼稚園保母を命ず、七級下俸、当分月俸三十三円を給す、東京府」の辞令を受け取ると間もなく千葉園長退官、廊下続きの小学校長が園長を兼務することになった。

これを機会にいろいろの変化が起こったのは当然である。廊下の境界の扉が開かれて小学校と自由に往復ができるようになり、幼児も校庭の外階段を通して三階の屋上に連れて行くことができるようになった。大気を胸いっぱい吸って、みんなで作った凧を持って走る。風に乗って糸の長いのはどこまでもあがっていく。糸の出つくした凧が小さくなって青い空に悠々と泳いでいるのは実にいい気持ちである。空を征服したやうな満足感がみなぎる。

幼稚園から小学校へ通じる最初の小室が女子教員の更衣室である。幼稚園にも鍵が渡されて一緒に使うようになった。その頃から通勤は和服、作業衣は洋服に切り替えて身も心も軽くなった。保育内容についても一八〇度の転回することは不可能であったが与えられた条件下で精一杯の改善のできるところは改めた。

兼務園長になって二代まで、主任の先生が三十年代で、四人の保姆は二十代という若い者ばかりの楽しい生活が続いた。春秋二回の遠足も動物園と植物園の反復であったのが郊外の方へ出ていって自然に接する機会も持つようになった。幼稚園の二階が音楽室であつたが私たちの希望が入れられて校長さんのとりなしで週一回のレッスンに通うようになったのもこの頃からである。能率をあげるために平素の保育にも馬力をかけた。

研修のことで特にこの時代に盛んであつたのは京橋区保育会の組織研究であつた。区内に公幼が七園位あつたらうか。五項目毎に部会を持ち全員がどの部会かに属して教材研究を継続してやつた。我々がその項目で一番困っている問題をテーマにとりあげて共同思考をしたり資料を持ち寄っては討議をした。壁に突き当たると会場校の校長さんが相談に乗って下さるといふ具合である。

私が属していた談話部会では年中行事に関するお話をどのようにするかについて毎回資料を持ち寄っては討議したものが、粗末ながり版刷りにしてまとめてある。童話の指導法については研究保育として批評会を持つようなこともあつたように思う。また教育紙芝居が普及していなかつたので、絵ばなしと称して部員が腕によりをかけて製作したものを発表会として反省会をしたこともあつたように思う。このようにして私にとっては希望を持って歩み出した仕事ではあるが結婚を境に一応幕を閉じた。

戦時中園児の母親として（昭和十九年頃）

戦果はなやかな頃、大阪のある私立幼稚園に長女が通っている時にたまたま参観日に保育参観をしてびっくりしたことがある。遊戯なんかを見ている間は「ああ良かった。家の子も楽しそうに、ついてやっているわ」と一安心、やがて年長児が保育室に集まって先生の指導で宣戦の御詔勅の復習が始まつた。ある優秀な男の子を指名されると一人立って鮮やかにあの長い御詔勅を最後まで立派に暗誦して、並みいる母親たちをびっくりさせた。私は思わずぞっとした。多分家の子どもはそれを覚える能力も無かつたのであろう。平素家へ帰つてもそれらしきことを口にしたことも無かつた。

それよりも毎日幼稚園から帰ってくると、口ずさんでいる歌が私がいづの間に覚えて、一緒に歌つたものである。誰の作詞か作曲か知らないが、今は亡き長女の思い出と共にその歌を忘れることができなない。

兵隊さんの手はかたくて大きい
敵をいらんで鉄砲もつて

ドドンとたまをうちだす時は
強い手だよ 本当だよ

（広島大学附属三原幼稚園）